

矢尾通信

孔田多紀

本文

《以下の文章は、ひょっとしたらこれを読んでいるあなたの物語かもしれない。心あたりのある方は、末尾に記した宛先までご連絡ください。

*

ノリコの一家が東京の西から千葉のA町に引っ越したのは、ノリコが小学四年生になる直前の春休みだった。転居と同時に小学校も変わったから、生まれ育った環境から一気に引き離された感じで、慣れない街になじむのには時間がかかった。

それは他の家族、特に母親も同じだったらしく、小中高一貫の私立の女子校で育った彼女は、これまで商店街のない場所には住んだことがなかったと夫に言い、確かに小さな日用品店が軒を連ねる一画は以前近所にあったにぎやかな通りと比べると貧弱な印象は否めず、コンビニやスーパーを除けば夜はほとんどの店が八時には閉まるので、不便なことも多かった。

マンションへ越した一番の理由は四年前に弟が生まれ、2DKの借家では何かと手狭になってきたため、父親の務める大学には近くなったものの、それでも都心に出るには一時間近くはかかる。

そしてもう一つの理由として、母親がノリコを私立の小学校に行かせたがったことが挙げられる。四年生からの転入はあまりないが、皆無ではない。マンションから子供の足で歩いて十五分ほどのところにある、評判もなかなか良いA小学校に入学が決まった。

年が明けてからというもの、慌ただしい事ごとが四人家族を見舞った。ノリコがその店を見つけたのは、移り住んで一か月が経ち、五月も半ばを過ぎた学校の帰りだった。いつものように母親から携帯メールで送られてきたちょっとした買い物の用事を片づけて、時計を見ると夕方のテレビ番組にはまだ余裕があり、ふだんなら曲がる道を直進して、一画の終端まで出た時だ。

歩いてきた筋と直角に交叉する道路を思いつきで右へ折れると、初めて見る風景が開け、進みだしてすぐ、古い木造の建物が目に入った。

「古本 矢尾」

と古ぼけた白い看板に、かすれた青の太い書体で書かれてある。

おかしいことだが、ノリコは一瞬、「古本（ふるもと）」家と「矢尾」家の共同住宅か何かなのかと思った。しかし、横に店名より小ぶりの黒い字で「古書売ります」云々と書かれてあるのを見て、すぐに得心した。古書店にこれまで入った記憶はないが、前のアパート時代、父親が蔵書を処分するというので業者が家まで買い取りにきたり、家の近くに何件かあるのを外から覗いたりしたことがあった。

店内は薄暗く、木枠にはめこまれたガラスに鞆を背負ったノリコが映り、反射した夕方の光のなかでノリコ自身を見つめる格好になった。もっと近づくと、狭い店内に、天井まで届く高い棚にぎっしりと並んだ古本と、地面に積み上げられた段ボール箱があるのがわかる。その奥に、誰かが座っている。棚に隠れて右半身だけが見える。店の人だろう。ずいずいと身をのりだし、知

らず、入口の戸にいきなり額がガタンとぶつかり、その音に自分で驚いて、ややためらったのち、深い考えもないままガラガラと引き開けていた。

奥の人物の姿は動かない。他に音もしない。静かだ。足を踏み入れると、地面の暗がりからひんやりとした空気が伝わってきた。そうか、夏はまだ先だ。冷氣からそんな連想が浮かび、即座に、自分はいったい何をやっているんだろう、という強い思いがノリコをとらえた。

しかし扉を開けた手前、すぐに引きかえすのもためらわれて、とりあえずは商品を物色するふりをしようか、と考えた。

そこは漫画コーナーのようだった。背の色がそれぞれ微妙に異なるぐあいに褪せた本が、どういう脈絡なのか、たくさん並んでいる。雑誌はたまに母親に買ってもらっても、コミックスはほとんど読んだことがない———というか、漫画自体、あまり読んだ覚えがない。クラスの同級生が話題にしているのを、何度も聞いたことがあったから、勿論どういうものかよく知ってはいたし、それなりに興味もあったはずだけれど、思い返すと、夢中になって読んだ思い出が、浮かんでこない。

そんなこと、初めて気づいた、と思った。軽く驚きにうたれた。

知らないタイトルばかりだ。それにどれも、物凄く古そうでもある。いったいどんな話なのだろう。しばらく眺めていると、少年向け、少女向け、もう少し年上向け、というふうに分けられているらしい、とわかった。

通路の半分ほどまで進むといきなり、奥の人物の姿が目に入った。地面から、大人の膝のあたりまで高くなった木の段に、小柄なおばあさんが座っている。一瞬、動けなくなった。頭を垂れ気味にして、身じろぎもしないので、眠っているのだろうか、と思ったところへ、こんにちは、と声をかけられた。

びっくりした。こ、こここんにちは、とややどもった。

「何か、お探し？」とおばあさんは言った。

「い、いえ……」

「じゃあ、誰か、お友達のご紹介？」

「……紹介って、なんですか」

たまたま見かけて、たまたま入った。それだけだ。なぜそんなことを聞くのだろう。ノリコが不思議に思っていると、あらっ、そうお、と、抑揚のない声で、おばあさんのほうも首をかしげる。

本当に、おばあさん、という感じの人だった。いくつくらいだろう。お母さんよりは当然、ずっと歳上だけど、お祖母ちゃんよりは若く見える。

「あなた、絵を描くのは好き？」

「絵、……ですか？」

ええと……ノリコはさらにしどろもどろになる。

「好き……かもしれません」しぼりだすようにやっと答えた。

「かもしれない？ そう」ふふっ、と、おばあさんは笑った。「じゃ、ちよつとこっちに、いらっしやい」

おばあさんの案内に従うと、漫画コーナーの奥に、大きめの掲示板が一つあり、その横に大学ノートが一冊、紐で吊り下げられていた。

掲示板は、縦と横のグリッドでマス目に番号をつけて分けられ、イラストを描いたいくつかの紙が、マス目の中に磁石で留められている。どうも描き手はそれぞれ違うようだ。線描や色塗りのタッチがどれも異なっている。

けれど共通しているのはみな、何かアニメの人物をモチーフにしたものらしい。絵というよりはイラストという感じ。

表紙に大きく「矢尾通信」とマジックで書かれたノートを開くと、前の方からびっしりと文字がつづられている。日付がついていて、パラパラめくるうち、白いページに追いついた。その少し前にはこうある。「二〇〇四年五月×日〜」。今週のことだ。その下には、

「②番さんへ。スツゴク上手ですね！！！！ ハア……うらやましい……」

「⑥番さん この前、プリキュアをかいてた人じゃないデスカ？ いつも楽しみです」

これはいったい？

疑問に思ったノリコの背後からおばあさんがずいっと肩に手をかけて、

「あなたも何か、書いてみない？」

と言った。

そのとき、携帯電話の音が鳴った。

確認しなくても相手は誰だかわかる。母親だ。

思いがけず時間が経っていたことに気がついてノリコは焦り、手短かにおばあさんへ別れをつけ、家路を急いだ。

*

ペン先からインクが流れだし、白い紙の上に擦過音とともに黒い軌跡をつくりだしてゆく。手のおもむくままに動かし続けていると、軽い抵抗感があらわれては消え、しだいに何か像の現れるような気配が立ちあがってくる。

静かな部屋だ。描いているのは別に文字でも絵でもないただの落書きだが、終わり方がわからなくて、楽しくて、時計を見たらもう一時間も経っていた。いつもなら眠っている時刻だ。

母親が数年前から申しこんでいる通信教材の毎月の課題を提出するともらえる金のシールを集めるとゲットできる景品で、久々に応募するのにマンガ執筆グッズセットを選んだのはやっぱり、あの古本屋に行ったせいだと思う。

今までマンガに興味はなかった。絵にもなかった。でもこのペンを走らせたくなる感じはなんだろう。

古本矢尾に初めて行った日から一週間後、学校から帰るとセットが届いていた。部屋に着くなりさっそく開く。中身はインクと紙、コピック、そしてGペン、丸ペン、カブラペン、いくつかのペン。特にGペンというのがすごく気に入った。木の軸に金属の鋭く尖ったペン先をつける。先端から中央にかけて溝ができていて、それを取り囲むようにしてうすく飾り模様が入っている。父親の机に昔置いてあったプラスチックの万年筆を思い出した。古びて、ほこりっぽくて、固

くなってまったく書けないあのペン……。

でも今日はインクを使いすぎてしまった。こんなペースだとすぐに切れてしまう。説明書にはなくなったら市販されているものを買えば良いと書いてあるけれど、どの店に行けば置いてあるのかがわからない。

名残り惜しくもゆっくりとした動作で片付け、机からすたすたとベッドに向かい、明かりを消した。仰向けになって掛けふとんを顔までひっぱり上げると、四畳半の子供部屋に一人でいることの暗闇が降りてきて、ノリコはすたと眠った。

*

ノリコが三年生の時から習字の授業が始まった。墨汁で服が汚れるというので、母親は嫌った。

「なんで必修なのかわからない。私が小学生だった時は一回もやらなかったよ」

と初めて習字の授業があった夜、前のアパートの、茶の間兼寝室の和室でノリコの服についた墨をシミ抜きしながら母親が憤るようにしていると、

「そりゃあ君は私立に行っていたから……俺も公立だったからあったよ。けっこう好きだったけど」

とノリコのそばでTVのプロ野球番組を見ていた父親が言った。

「だいたい、大きくなって必要な技術でもないじゃない。ペンできちんときれいな字が書ければいいわけでしょう。理不尽だよ。子供たちが可哀想。あんなでっかい用具セットまで毎回持たされて」

母親は以前から引っ越したがっていた。アパートは鉄筋コンクリート製とはいえ築年数が古く、四、五年前に一度、空き巣に入られたこともあった。

ウン……面倒な話題だと思ったのか、父親は頭を掻きながら試合観戦に戻った。

母親は普段から衣服にこだわる性格で、ノリコも他の同級生と比べるとしっかりしたものを着させられていたけれど、その夜以来、週に一度、時間割に習字がある日はできるだけ地味なものを着るようにして、もちろん授業中は汚したりしないように細心の注意を払った。

筆で書くこと自体は好きだった。鉛筆やシャーペンとは違って紙にふれる時のやわやわとした感触がいかにも頼りないけれど、どっしりした力強さもある。加減によって太さも形も自在な表情が出る。絵を描くような面白さかもしれない。

とは言っても、図工の時に制作する絵はニガテだった。色塗りがヘタなのだ。いつも水彩絵の具をべっとり塗り重ねすぎてしまい、なかなか乾かずに垂れ落ち、ぐちゃぐちゃと色が混ざって、全体がくすんだような暗い調子になる。はっきり言って汚い。

下書きはほめられる。今のクラスメートで仲の良いサヤも「どうやったらそんなふうによく描けるの?」といつも聞いてくる。そんなのは簡単だ、とノリコは思っている。ゆっくりやれば誰だってできる。ものをよく見て、目に映る構図を何度も確かめるようにしてじっくり描いていけばいい。サヤの場合は適当なのだ。適当な観察で適当にバツバツバツバツと描いていくから、

どうしたって途中でバランスが崩れる。そう指摘すると、「それが難しいんだよ」とサヤは言う。サヤは色塗りが得意だ。コツを聞いたら、ノリコもよくわからなかった。二人で合作するとちよつどいいのかもしれない。

宿題や校内写生大会で何か提出しなければならないとなると、最後の一時間くらいまでずっと下書きをして、あとはうすく溶いた絵の具をササッと塗っていく。担任の笹塚先生は「たとえば夕暮れ時なんか、じーっと空を見ていると、オレンジ一色というわけじゃない。ものすごく複雑な陰影があって、いろんな色が含まれていますね。もちろんそれを全部、描くことは不可能だから、単純化していくことも大事なんだけど、少しずつ色を重ねるようにして、……」とアドバイスをくれるのだが、意識するとやはりベタベタと重くなり、あまりうまくいかない。

鉛筆で描く絵や習字と、ペンで書くのが好きなのは、単純さに惹かれるのかもしれない。写真もカラーより白黒のほうが好きだ。

*

古本矢尾に貼り出される絵の仕組みはこうだ。近所に住んでいるか、もしくは近くの学校に通う小学生から中学生までなら、誰にでも資格がある。テーマはなんでもいい。手法も自由。ただし大きさは大学ノート一ページ分くらいに収めること。どこか隅のほうに本名ではなくてペンネームを小さくサインする。二週に一度、月曜日に貼り替えがある。一人一枚、先着順で十名まで掲出できる。と言っても競争はそれほど激しくなくて、枠が埋まらないことも多い。「矢尾通信」と書かれたノートに、誰でも感想を書ける。参加者の楽しみの半分は感想を読むことにあるかもしれない。

たったそれだけのシステムになぜあれほど熱心にとりくんだのか、なぜ町の古本屋が子供たちのためにそんな商売にならない企画を続けていたのか、いつから始まったのか、今となってはよくわからないことのほうが多いが、とにかくそういう環境があった。

初めて訪れた日から三週間後、月曜日の夕方、学校からの帰りにノリコは一枚のイラストを持っていった。先日、学年の生活係に決まり、当番で毎週月曜はウサギの世話をしなければならなくなった。これからは下校時刻が他の児童より少し遅くなる。はやる気持ちで、学校から歩いて五、六分の古本矢尾へと道を急いだ。店に来るのは三度目。すでに八人の作品が飾られていた。

何を描くかはものすごく迷った。ほとんどの子はマンガかアニメのキャラクターを描いている。さんざん考えた末、ノリコもキャラクターでいくことにした。

アニメ『忍たま乱太郎』に登場する、主人公の親友きり丸である。ノリコはきり丸が好きである。『忍たま乱太郎』のキャラクターの中で一番かっこいいと思う。名前もキリッとしている。

以前サヤと『忍たま乱太郎』の話になった時、ノリコがきり丸を推すと、

「えーっ、でもなんだか笑い方が下品じゃない？」

確かにきり丸のエヘラエヘラした笑いは見苦しい。それにケチだ。でもその二点を補って余りある存在感ではないか。

「ちよつと変だよ、そのセンス」と、サヤは納得できない表情だった。

マンガ家セットのペンで前日、一気に描いた。色はつけない。

「へえっ、上手いもんだねえ」と古本矢尾のおばあさんが、きり丸のイラストを受け取りながら言ったのを聞いて、胸の奥につまっていた苦しいものが一気に氷解したようにほっとした。それでやっと、その日、朝から自分がずっとドキドキしていたことに気がついた。

あとは待つだけだ。

店内を何気なく眺めていると突然、入口の引き戸が音を立てて開けられ、暮れつつある夕陽を背に、一人の男が入ってきた。大きな紙袋を持っている。本を売りたいんですけど……と言いながら、おばあさんの手前の机にどんと紙袋を置き、中から本をとりだし始めた。

その時のおばあさんの様子が変わった。あっそう、と冷たい声で言い、乱暴な仕草で積み上げられた本にすばやく目を通していく。さっき、きり丸の絵をニコニコしながら受け取った時とはまったく別人だ。

男も驚いたようだった。本が再び積み上げられていくのを黙って見ている。

一一円になるね、とおばあさんがそっけなく言った。けっこう良い値段だ。男は了解し、金を受け取ってさっさと出て行った。不思議そうな顔だった。

ノリコは入口に近いほうでマンガを探すふりをしながら、じっとやりとりを聞いていた。

ヒロミという子が気になっていた。

素性はわからない。みんなペンネームでサインするから本名はうかがいしれないし、絵を貼りにくる年代の女子は店内で何度か見かけたが、互いに話しあったことはない。

通うのは週に一度くらい。平日の放課後、家に戻る前に立ち寄り、「矢尾通信」に書かれた感想を見て、おばあさんと話し、店内を少しのぞいてまわって帰路につく。時間帯のせいなのか、店を訪れる客を見たこともあまりない。だからこの前の、本を売りに来た男は印象的だった。

古本を買うことはない。勝手な買い物は母親に禁じられてもいる。それでもこの間、特別に一冊十円だというので、おばあさんに薦められた一卷完結のマンガを購入して帰った。家族に見つからないように、机の引き出しの奥に隠してある。まだ全部読み通してはいない。

七月だった。月曜日で、ノリコは三度目のイラストを提出にきた。題材は『とっとこハム太郎』のロコちゃん。

三度目にして早くもネタに困っている。ペンを使うことは好きだけれど、どうしてもロコちゃんが描きたかったのかと言えば、違う。そもそもマンガやアニメにそれほど詳しくない。前回は、だいぶ以前に観たことのある『YAT安心！ 宇宙旅行』の天上院桂にした。それに「ヒロミ」という名前で「矢尾通信」にコメントがついた。

「のりさん はじめまして。きり丸もそうでしたけど、今回もすごいうまいです。もっともっと見てみたいです」

「のり」というのはノリコのペンネーム。考えだすと迷いそうだったので、まったく捻らずにつけた。

ヒロミはほぼ毎回参加している。他のみんなと違うなどノリコが思ったのは、ヒロミは既存のキャラクター像を描かないのだ。この前はシャーロック・ホームズとジョン・H・ワトソンが二人

で自宅にいる様子だった。二人の像はまったくオリジナルのものであって、「ベーカー街221Bのホームズとワトソン」というタイトルがなければ誰を描いたものかわからなかっただろう。人気がないかといえばそうではなく、ふつう一点のイラストにつくコメントは五つくらいだが、いつも七つか八つはついている。ノリコは最初が三つ、前回は四つだった。

初めて感想を目にした時はさすがに緊張した。おばあさんに絵を渡して翌週の火曜日、古本矢尾にやってきた。「矢尾通信」に書かれる感想には好意的なものも、そうでないものもある。壁にかかった大学ノートを手にとり、見たいような見たくないような、一瞬の逡巡ののち、思いきってページを開いた。

「③番さん きり丸、私も好きです！」

「のりさんへ 初めての方ですね。新たなライバル登場か？（笑）」

二度読んでノートを閉じ、天井をぼうっと見上げた。身体の内がざわざわと騒いだ。

「矢尾通信」に書かれた感想はこれまでだいぶ読んできた。そこにあるみんなの名前が、一気に身近になった気がした。

ここに最初に来たのは五月だった。今も店内はその時と変わらないような明るさで、地面から立ち昇る空気はひんやりしている。

引っ越してから三か月以上が経ったのだ。この辺りの地理にはけっこう詳しくなった。季節は春からすっかり夏になり、夏休み前で学校のみんなも浮き足立っている。来週には終業式がある。

ロコちゃんの絵をおばあさんに渡した。今回は二番目だった。六時近くになり古本矢尾を出て少し歩くと、いきなり、激しい夕立に襲われた。すぐ近くに見えるアパートの屋根の下まで走り、降り終わるのを待つ。ツンとした土のおいが漂ってくる。

*

終業式の日、教室の掃除をしながら、同じ班のサヤに古本矢尾のことを話した。

「ふーん、ノリコン家ってどこだっけ」

「A町だよ。十五分くらいのところ」

サヤの自宅から三十分の電車通学で、互いの家は遠いから、まだ遊びに行ったことはない。

「でもさ、そのおばあさん、なんでそんなことやってるんだろうね」

「えっ、……さあ」

「だってそのお店、古本屋さんなんですよ？ ノリコたちの相手するのって、別にショーバイでもなんでもないじゃない？」

確かに、そう考えてみると変だ。

「うーん、シュミってやつ？」と苦しまぎれに答えると、

「なんだか怪しくない？ うまい話には裏があるって、よく言うじゃん」

別にうまい話というわけではないと思うけれど、よくわからない。そうじゃない、ただサヤとは今日、絵の話がしたかっただけだ。

「だって、みんな何人も持ってきてるんだよ、そこに」

「みんなって、誰」

「……わからない」

「会ったことないの？」

「ある——けど、ちゃんと話したことはない。おばあさんの話ではいつも、十人とか二十人とか……」

「おばあさん、なんていう人なの？」

「……知らない」

そうだ、おばあさん、おばあさんとずっと胸の内では呼んでいたけれど、なんという名前なのだろう？ 矢尾さん？ でも確かめたことはない……ノリコは次第に頭がくらくらしてきたので、持っていた箸の柄をしっかりと握った。

おい、そこの二人！ 遊んでんなよな！ と、机運びを終えたクラスのリーダー格の男子の声が飛んできたので、サヤとノリコは急いで片づけるフリをした。

これが終わったら、もう夏休みだ。

その週はいくつかの用事が重なり、次に古本矢尾へ行ったのは、終業式の翌週だった。絵はすでに新しいものへと変わっていた。ヒロミのものもある。

あいかわらず店内は薄暗く、夕方のアスファルトのきつい照り返しが入口のガラス越しに、漫画コーナーの奥にいるノリコまで届く。サヤから質問責めにあつた時はやや自信をなくしたが、こうして、並んだ本とおばあさんを前にしていると、そういったことはなんだかどうでもよく思える。

いつものように「矢尾通信」のノートをパラパラとのぞく。夏休みだからか、ふだんよりコメントの数がどうも多らしい。その一つ一つに目を通していきながら、誰か自分のことについて触れているんじゃないかと気になって仕方がなくなってくる。もちろん今回は提出していないのだから自分の名前が出てくるはずもないが、ノリコはノートの更新分を三度読んだ。今回は神風怪盗ジャンヌを描いたヒロミが一番人気のような感じだった。コメントが十三もある。自分の最高がロコちゃんの五つだと考えると、驚くべき数字だ。

「今度の交替は、来週ですか？」

「そうだよ」と言っておばあさんが静かに両眼をつぶる。背後に置かれた小ぶりの扇風機が、首をゆっくりと振りながらはつきりしない風を送ってくる。その奥に住居らしき部分が広がっているが、灯りが落ちていて見通せない。

ノートを見ながらいつも、ノリコはおばあさんに色んなことを話す。学校のこと、家のこと、前に住んでいた街のこと、……。言葉を多くは費やさず、おばあさんはそれをやさしく聞いてくれる。しゃべるうち、ついつい、ずっと聞いていてもらいたくなってしまう。

「おばあさんは、どうして古本屋さんをしてるの？」

「えっ？」といきなりノリコに問いかけられ、驚いた顔をして、「うーん、どうしてだろう……そうだね」しばらく答えを探していたようだったが、やがて決心したように問い返した。

「古本と、普通の本屋さんで売っている本の違いは、なんだと思う？」

「……う、うーん」考えてみたが、わからない。「すごく昔の本が多い？」

ははは、とおばあさんは笑って、

「私らが売っているようなのは、必ず、誰かが先に持っていたものさ。それが、お金に困ってとか、家が狭くなってとか、まあいろいろ理由はあるだろうけれど、要は誰もが完全には捨てられないまま、川の流れが集まるようにして、今、ここに揃っているわけだ。

——ノリコちゃん、想像してごらん。ここにある本は全部、それぞれ違う来歴を持っていて、いろんな人の手に渡りながら、また必要としてくれる別の誰かがやって来るのを、いつも待っているんだよ。私らは、その出会いの場所を提供しているってわけ。ほら、聞こえてこないかい？ 本たちのざわめきが……」

ノリコはふりむいた。それまで、静かに整然と並んでいるように見えた本棚の、箱の中のたくさん本が、動き出し、のっぺらぼうの仮面を捨て、一気に、さえずり始めたような感覚にとらわれた。流れる水の音や、人の雑踏までもが聞こえてくるような気がする。何かにつき動かされるようにして、ある棚に手をかけた。

「あっ」

思わず声をあげる。

「どうしたんだい」

「この本！」

見覚えのある本だ。

『それでも月には誰かがいる！』ドン・ウィルソン著。大島和子訳。

急いで、奥付ページをめくる。

あった！ 「島崎蔵書」の印。

「ずっと昔——引越す前の街に住んでいたころ、私の家は狭くて、私の子供部屋はなかったの。それで、よくお父さんの書斎で遊んでいて、覚えているのがこの本。なつかしい！ ほら、ここに『島崎蔵書』ってあるでしょ。これが、お父さんが持っていたしるし。今はもう使ってないけど、前は買った本の全部にこのハンコを押してたんだって。お父さんの本だったんだ！」

「へえーっ」とおばあさんは珍しいものを見たような顔つきをして、「ノリコちゃんのお父さん、宇宙人の話が好きなのかねえ……どんなお仕事してるの？」

「××大学の、国語の先生」

「じゃあ、きつこの本のこと、あんまり好きじゃなかったんじゃないかな……それできつと、こっそり手放しちゃったんだね」

「おばあさんは、お父さんに会ったことがあるの？」

「うーん、といっても、たくさんの人から本を買うからねえ、……」

その時、入口の扉をガラッと開く音が響き、「こんにちは！」と言いながら、女の子二人連れがやって来た。

それを潮に、ノリコは帰ることにした。気づけば、だいぶ日が暮れかかっている。急がなければ

。今度は何にしよう。赤く燃えあがる太陽を見ながら、家路につくノリコは考える。

夏のあいだは、毎朝六時から近所の公民館の前の広場でラジオ体操がある。

八月十日をすぎればもう夏休みも後半戦だ。ほとんど無限に思われた自由な時間にもやがて終りが見えてきて、焦りに似た気持ちが日増しに募ってくる。

両親の盆休みが終わって、父方の郷里から帰ってきた翌日、体操を終えるとノリコは久々にクラスメートのマチコたちを見かけた。

「あっ、マチコちゃん、このあいだはありがとう」

八月六日、ノリコの家で誕生パーティーがあった。十歳になる。夏休みの最中だからそれまで毎年、友人を呼ぶことはなかった。去年買ってもらった携帯電話で連絡をとり、今年やっと初めて、自宅に招くことができた。サヤも来てくれた。

慣れないことに母親も準備がたいへんそうだったが、悪い気はしないようだった。二人の手になる大きなケーキをあの日、冷房の効いた部屋で皆、満足そうにたいらげた。

「あっ、ノリコちゃん久しぶり」

すでにマチコの周りには、仲良しらしい女の子たちが五人いた。知らない顔もある。ノリコは越してきてまだ日が浅いし、クラスで一番仲の良いサヤは区域が違うので、体操が始まってからは早めに帰るのが常だった。

皆で何か携帯ゲーム機を覗いているようだ。あれは……なんだろう？ 小さい頃は携帯ゲーム機といえばゲームボーイくらいしかなかったが、このところ機種が増えてきた。いずれも持っていないノリコには、どれがどれだかパッと区別がつかない。

「何やってるの？」

「えっ？ ーだよ」

名前は聞いたことがあるが、向けられたゲーム画面を見てもよくわからなかった。そのまま十分ほど、皆が熱中するのを眺めているうち、だんだんそれにも飽きてきた。

「ノリコちゃんはさあ」急にマチコが顔を上げ、特徴的なくりくりした眼で尋ねてきた。「何かゲームとか、持ってないの」

「えっ？ うーん、えと、えと」

去年、父親が誕生日プレゼントにプレイステーション2を買ってくれたが、早くも死蔵しつつあり、両親がたまにDVDで映画を観るくらいにしか使われていない。友達がプレイするのを眺めるぶんにはいいが、自分で長い時間をかけてクリアするだけの根気はないのだ。

「この前、おうちに入れてもらった時も、全然なかったよね。漫画とかも」

「うん」

「えーっ、そうなんだ！」知らない女子が大きな声をあげる。「じゃあいつもふだん、おうちで何してるの？」

なんでお前にそんなことを聞かれなきゃいけないんだよ、と一瞬思うが、口にはしない。それより、いきなりそんなことを聞かれたために、ノリコは強い緊張に襲われた。答えようにも言葉が出てこない。

彼女たちのあいだに空白が横たわった。それは時間にすれば三秒にも満たない短い時間だったが、それぞれの表情の底に嘲りの色がさっと走るのをノリコは鋭く感じとった。

「それはですねえーっ」

と、そこへマチコが芝居気たっぷりに進み出てきた。

「たぶんさあ、ノリコちゃんのお母さんが、とっても厳しいんだと思う」

「あ、それ私も思った」

誕生パーティーに来てくれた同じクラスのワカがうなずく。「ニコニコしていたけど、ちょっと怖かったかも」

フンフン、と演技じみた調子を続けながらマチコが人さし指をふる。

「ほら、Bちゃんのお母さん、……Bちゃんから聞いたんだけど、Bちゃんのおうちは夜七時半以降はテレビ見ちゃだめなんだって。お母さんが禁止してるんだって」

「えーっ、どうして？」

「シンコウ上の理由なんだって」

「シンコウ上の理由？」

「シュウキョウ上の理由ってこと。Bちゃんのお母さんの」

「へえーっ」信じられない、という顔。

「だから、お母さんが厳しいと、そういうことがあるんだよ。ノリコちゃんのおうちも……」

マチコがノリコをじっと見つめていう。

「シンコウ上の理由なの？」

これはさっきの知らない女子。ニタニタした笑いが顔に貼りついている。

「別にそういうわけじゃないけど……」

しかしそれからすぐに、彼女たちの興味はまた携帯ゲーム機へとうつつた。

ノリコは五分ほどしてその場を去った。バイバイ。

家で何をしているのかといえば、本を読んだり、最近では絵を書いたり、弟の世話をしたりしている。テレビもよく観る。特にアニメ番組は好きだ。そしてまた明日が始まる。……それ以外のことはこれまで、あまり考えたことがなかった。

だが、マチコに母親のことに触れられたとき、ノリコはとても嫌な気がした。

お父さんだって、お母さんには頭があがらない。引っ越してきてから、昼間は経理のパートに出て、夕方には帰ってくる。託児所へ弟を迎えに行き、父親が帰ってくるまでのあいだ、夕飯の支度をする。ノリコもときどき手伝う。とくべつ厳しいわけじゃない。誕生日にはケーキを作ってくれるし、ふだんなら高価すぎるおもちゃだって買ってくれる。

ノリコは、母親が強い調子で言い放った、「なんで習字が必修なのかわからない」だとか、「商店街のない場所には住んだことがなかった」だとかいった言葉を思い出す。

動かしていたペンを止める。もう夜の十一時だ。眠らなければならない。ひとしきり机の上を片づけて、ベッドに就く。

終わりは突然やってきた。

九月に入って、学校が始まりしばらくしたある日、店まで歩いていくと、中の商品や本棚はもちろん、看板まで、「古本矢尾」の痕跡がすっかり消えていた。道を間違えたのかとノリコは思ったが、そうではない。

その日は新しい絵を持って行く日だった。先週会ったときのおばあさんの様子も、いつもと違わなかった。「また来週ね」という声がまだ、耳の中に残っている。

気がついてみると、終業式の日にはサヤが言っていたように、ノート以外で実際に交流を持っていた女の子は誰もいない。もちろん連絡先も知らない。おばあさんについても。

ノリコはちょっとのあいだ立ちつくし、やがて誰か大人に聞いてみたいと思った。しかし誰も通りかからない。通りのずっと先に、二人連れの警官の姿が見える。警官はやはり少し怖いので、急いでくるっと引き返す。

このようにして、ノリコと「古本矢尾」での関係は全く絶たれてしまう。

(以下略) 》

2年E組

佐々木博光

Mail:****@gmail.com

Twitter:@kkkbest

ノート

佐々木博光は今年の六月、所属する公立A高校の文芸部が年に四度発行している機関誌に、「矢尾通信」と題する前記の文章を掲載した。いちおう、「問題編」と銘打ってある。「解決編」はまた三ヶ月後だ。

佐々木がこれほど長い文章を書いたのは初めてのことだった。過去には短い書評のようなものを書いたのみ。部に愛着がない。本当のホームグラウンドは、掛け持ちしている美術部だと思っている。にも関わらず続けているのは、同じ中学だった友人から入学したての頃に誘われ、さっさと辞めてしまったそいつをよそにグズグズしているうち、抜けられなくなってしまったためだ。主な活動内容が年に四度の機関誌発行なのだから、そう忙しくはない。

半年ほど前まで、部内には面倒なゴタゴタが起こっていた。A高校の文芸部はもともと歴史が古く、卒業者のうちにはその後プロになった者も何人かいる。佐々木が新生だった頃、部には久しぶりのエースが二人もいて、十五名ほどの部員をひっぱっていた。

数年前から、作った機関紙を公式ブログにアップし、外部の誰でもインターネット上で見られるようにした。そこに掲載したある作品を、エースの一人がある小説雑誌の公募新人賞に応募し、最終選考まで残ったものの落選。しかし選考委員特別賞という佳作扱いで、新人賞発表の翌月号に掲載された。ところが、もう片方がその作品について「自分の盗作ではないか」と主張しだしたあたりから、話がややこしくなった。出版社もまきこんだ厄介な事ごとや陰悪なムードが続き、脱退者が続出した。佐々木もそれに乗じればよかったようなものだが、なんとなく抜けそび

れた。今や五人しかいないという人不足のなかで急遽、副部長にまで指名されてしまった。

そろそろ感想文でお茶を濁すだけではすまないプレッシャーが周囲から強まり、ああだこうだと呻吟していた時、「古本Y**」に関する記憶が甦った。

A町には公立の小学校、中学校、高校の他に、私立学校が二つもある。地元である佐々木は公立学校に通い続けていたが、いまの同級生には私立出身者も多い。そして「古本Y**」——現在、佐々木が美術部にも在籍しているのは、あの場所でイラストを描いたことが大きなきっかけになっているだろう。古書店の様子はだいたい、「矢尾通信」に書いた通りだ。佐々木は「ヒロミ」という名前で描いていた。下の名前のヒロミツに由来する。「ヒロミ」は男だった……これが構想中の「解決編」のネタの一つにはなるかもしれない。といっても、末尾にはっきり本名を記しているのだから、推測はされやすい。

もう七年ほども前のことだから、細かなことは覚えていないが、「ノリ」という子供がいたのは事実だ。しかし、「矢尾通信」に登場する「島崎ノリコ」はそこから佐々木が敷衍して作り上げたもの、自分の見聞きした記憶を改変して勝手に想像したものにはすぎない。

終盤近くの、古書店がいきなり消えている箇所は、佐々木の実体験だ。あの時は呆然とした……。その衝撃が、以後の佐々木自身をかたちづくっている感覚がある。最近まですっかり忘れていたが、頭の底で潜伏し、いまこうして浮かび上がった。

いったいどんな子供たちがあの店に通っていたのか、そしてなぜ急にいなくなったのか。もしかすると、あの時期に同じく「古本Y**」へ足を運んでいた人間がA高校にもいるかもしれないと思い、佐々木はそれとなく分かるかたちで「矢尾通信」を書き上げた。

機関誌の制作から一か月が経った頃、ある朝、佐々木はいつも利用している学校の下駄箱に通の手紙が入っているのを発見した。クリーム色のかわいらしい封筒を開けると、便箋五枚にわたって丁寧な文字で書かれてある。内容は以下のとおり。

《とつぜん、はじめてお手紙をさしあげますのをお許してください。

先日、佐々木さんが書かれた「矢尾通信」を拝読し、とても懐かしい気持ちになりました。あのお話に「古本矢尾」と書かれているのは、以前A町にあった、「古本Y**」のことですよ。

佐々木さんも、お店に通われていたのです。そして、なんの予告もなしに店がたたまれたことに、非常に戸惑われたのだと思います。

率直に申し上げますと、あそこに書かれている「おばあさん」は、私の祖母です。

祖母と私、また私の両親は、あの建物の二階に住んでいました。しかし父と母は別の仕事をしており、ずっと昔から古書販売を営んでいた祖母が一人で、店に立っていたのです。

お話の中に、「なぜ町の古本屋が子供たちのためにそんな商売にならない企画を続けていたのか」という一節がありますが、それはひとえに私のためでした。私は小学校高学年の頃、とても体が弱く、学校を休みがちでした。本当はクラスの友人たちともっと遊びたいのに、体のせいではなれないのです。

それを見かねた祖母は、もともと私が絵を描くのが好きだったことを利用して、交流の場を作ってくれました。ご存知のように、A町には学校がたくさんあります。子供の数も多い。絵を通

じて、垣根を越えて子供たちが競い合ったり、刺激を受けたりすることができるよう、祖母はあの空間を支え続けてくれたのです。

といってももちろん、そんな大げさなものではありませんでした。本業の邪魔になってはいけませんし、ちょっとくらい秘密めかした方が、幼い誰しも熱心になれる、という考えもあったようです。互いが互いを知らない匿名の地下クラブのような状態のまま、しだいに輪が広がり、みんな足しげくやってきてくれた……それが二年ほど続いたのでしょうか。私も、お店に顔を出すことは滅多にありませんでしたが、絵は毎回、提出していました。二階に住んでいるのですから、常に一番乗りです。「矢尾通信」にも、熱心に書いていましたよ。なんという名前だったのかは、ちょっと恥ずかしいので省略させていただきます。

お店を辞めたのは、あまり詳しくは書けませんが、祖母がもう店を続けられなくなったためです。急遽入院することになり、その頃、祖母と非常に折り合いが悪くなっていた父が、勝手に店をたたんでしまう暴挙に出たのです。すべての本を売り払い、看板をとりさり、……あつという間でした。よく来てくださっていた皆さんに、何もお伝えすることができなかつたのは、とても申し訳なく思っています。私は小学六年生になっていましたが、本当に悲しかった——あんなに悲しかったのに、でも佐々木さんのお話を読むまで実は、最近思い出すことも少なかったことに気づきました。

私は「ノリコ」ではありません。が、確かに、あれは「私の物語」なのかもしれません。何より、いまも「古本Y**」を大切に思っていてくださった方がいるということに感激し、筆をとらせていただきました。お礼を申し上げます。

お役に立てたかどうかはわかりませんが、「解決編」を楽しみにしています。あの頃と同じように、別の名前で、そうですね、仮に「リノ」と名乗らせてください。九月の掲載を、お待ちしております。

リノ》

この一か月というもの、不安と期待による緊張が佐々木を襲った。あてのない賭けのようなものだ、もしかするとなんの反応も返ってこないのではないかという思いにとらわれ出した朝、ふだんのように何気なく開けた下駄箱から飛び出した小さな封筒に、佐々木の胸はうちふるえた。

が、内容は正直に言って、期待の半分ほどだった。真相を確かめることができた満足感のいっぽう、これをそのまま「解決編」に書いても物足りない、という計算が働く。

まだ時間はある。そのうち考えようと佐々木が判断したその二週間後、今度はメールアドレスに反応があった。内容は以下のとおり。

《こんにちは。佐々木さんがA高校文芸部の機関誌に書かれた「矢尾通信」を読んだ者です。「心あたり」があったので、メールさせていただきたくさいです。

はっきりいいますと、佐々木さんが「古本矢尾」ことA町に以前存在した「古本Y**」について書かれたことは、あまり好ましくない状態です。まあ高校の文芸部が出しているものなのでそれほど影響力があるとは思えませんが、あれは一部でタブーになっている話題です。わかりやすく申しますと、あそこに書かれている老婆は、数年前に逮捕された窃盗グループの一人です

。その筋では知られた話ですので、もし詳細にご興味ある場合は、たとえば駅商店街のT書店の方などに話を聞かれるとよろしいのではないのでしょうか。

それでは。》

——窃盗グループ？

思いがけないなりゆきに、パソコンの画面を覗きこむ佐々木の心臓は高鳴る。

しかし、もしここに書かれてあることが本当だとしたら、あの「リノ」という人物からの手紙はいったい何なのか？ どちらを信用すればいいのか？ はっきり矛盾する二つの文面。

翌日、佐々木はT書店へと向かった。だいぶ昔からあるらしいたたずまいの古本屋で、コミックは置いていないが文庫コーナーが広く、何度か買ったこともある。久しぶりに訪れて適当に文庫を二、三冊見つくり、購入しながらそれとなく、店員の中年女性に「古本Y***」の話を切り出した。すると、次のような話を聞かせてくれた。

T書店は三十年ほど前、彼女の父親が開業した。年老いたため、しばらく前から彼女が店の営業を引き継ぐかたちになっているが、「古本Y***」がとつぜん消えた時はまだ、父親も元気だった。その父親から聞いた話では、「古本Y***」は、置いてある本の筋はいいものの、このあたりの古書組合にも属さず、謎めいた店だった。仲間うちでもしばしば噂した。店ができたのは比較的最近で、活動していたのは実質五、六年くらいではなかろうか。消失からしばらくしたある朝、一つの新聞記事が父親の目に飛びこんできた。名古屋を中心とする△△組系の「Y***」一家と名乗るグループが、この付近で活動していたのを一網打尽に逮捕された。あの古本屋は、その事件と何か関係があったのではないかと父親は推測した。

——いや、私も父から聞いた話だから確かじゃないんだけど、……このところはもう、寝たきりになっちゃってね。

あのおばあさんの座っていたカウンターの奥は、いつも暗くてよく見えなかった。そこはおそらく住居じゃなくて、アジトか、倉庫みたいなものだった。窃盗に入られて、本が盗まれていくことも時折あるようだ。通常の金品は、別ルートで処分する。しかし本は、宝石や貴金属のようにはいかない。場所をとるし、古書店に持っていったところでたいていは買い叩かれ、換金して利益を上げるのは難しい。そこで、自分たちで独自に売ることになった……とすると、その店に並んでいた本は、ほとんどが盗品だったはずだ。たまに客が売りに来ることもあったらしいが、それが仕入れのメインというわけではない。おばあさんの仏頂面はそれを示しているのではないか。

——でもそれって、ばれたりしないんですかねえ。

——うーん、たとえば、東京の西部で仕入れた本を、千葉で売る。それほどの有名店じゃなくて、地域でいわゆる雑本を売っていくような店だったら、……。もちろん、元々本好きでなきゃそんな利の薄いことは普通しないでしょうから、それなりの目利きではあったんだと思いますよ、二〇〇四年だったら、古書のインターネット通販も盛んになっていただろうし……うちはやってないですが……あまり目立ったことをしなけりゃ、けっこうばれないんじゃないですか。

帰り道で佐々木は、やりとりを反芻しつつ「古本Y***」のことを考えた。一番わからないのは

、やはりあの絵のことだ。いったいどうして、あんなことをしていたのか？ 最も有力な説明としては、情報収集だと思われる。私立だと、公立とは違って、いろんな区域から通学してくる。一時間近くかけて電車通学していた同級生もいたのだ。「矢尾通信」の中のノリコのように、佐々木もおばあさんに様々なことを話した。いま思い返すと、どうしてそこまで、と感じる話も。あのおばあさんにはどこか不思議なところがあった。聞かれていないこともつい喋ってしまう。「太陽と北風」でいう太陽のようなものだろうか。何度も通ううちに、我が家の秘密を漏らす子供もいたろう。父親と母親との仲や、家の構造、等々。

本当だろうか？ T書店の親父の推理にすぎないのでは？ 夕食を食べ終えてなお思いめぐらしていると、棚に並んだ本の中で、ある一冊が目についた。

『それでも月には誰かがいる！』。

そうだ！ 「矢尾通信」に書いたように、「古本Y**」で佐々木は、「佐々木蔵書」と印の入ったこの本を発見し、その場で買い求めた。あれは不思議な体験だった。おばあさんのとのやりとりも、記憶にあるとおりで。A町に引っ越す四、五年前、家は空き巣に入られた。その時、本が盗まれたかどうかは定かでないが、一方で、古書業者が父親の不要な蔵書を買取りに来たこともある。

念のため、佐々木は尋ねた。現在は教授になった父親は、盗難についても、本についても、覚えていない、といった。

ポン、と返された黄色いカバーが、妙に生々しく映る。

*

あれはいったいなんと叫んでいるのか、野球部員たちの出す気合の入った声が時おり、窓の外から飛び込んでくる。

今日の美術室には二人しかいない。

夏前に三年生が引退すると、現役の美術部員は一気に十人ほどになった。十月の文化祭には部全体での展示会があるのだが、まだ八月の頭だからみな余裕で、美術室は基本的に毎日午前中から開いているものの、部員は来たり来なかったり、一日誰もいないこともある。受験生と違って二年生らはそれほど勉強に追いまわされてはおらず、もちろん熱心な同級生は毎日予備校通いをしている。佐々木のほうはというと、文芸部での次の機関誌発行までにはまだ間があり、夏休みも週に何度かはこうやって来ている。

誰と一緒にいるかは毎回違う。三人以上なら別に問題ない。二人でも後輩となら向こうが気を使ってくれる。けれど、いま隣にいる法月佐和子は同じ二年で、しかも佐々木と二人だけという状況は初めてだ。それにふだん特に親しいわけでもない。

といっても、法月と親しくしているやつはそれほどいないのではないかと佐々木は思う。そんなに社交的なほうではないし、よくわからないけどなんだかいつもぼうっとしていて、心ここにあらずという感じ。沈黙だってへっちゃら。空白恐怖症のやつには耐えられないだろう。

一緒にいて気疲れしないともいえる。なのだが、なんといっても女子なので、今日も昼前から佐々木はやや緊張感を覚えていた。一年の時からそうだった。掴みどころがなかった。制服が夏の

薄いシャツになると、よく背中を向けたとたんブラジャーのストラップが透けて見えて、目のやり場に困った。今ではそんなことはないが。

絵の腕だって格段、目を見張るものがあるわけでもない。部内でも中の上くらいだろう。デッサンや陰影の感じはうまいものの、色使いがなんとなくピンとこない。昔からそうだったようだ。卒業後は美大に行きたいらしい。それで母親ともめていると誰かから聞いた。

十二時半になって手を休めた。野球部員の声もいつの間にかやんだ。ただ蝉の鳴き声が響いている。

「購買に弁当買いに行くんだけどさ、何か一緒に買ってこようか」

と佐々木が聞くと、

「え？ ああ、いいよ、ほら、家から持ってきたから」

と法月は自分の鞆を示した。

一階の購買で買った三五〇円のカラアゲ弁当とリプトンの五〇〇mlパックを持って、三階の美術室に戻った。法月はすでに食べ始めていた。佐々木ももくもくと食べた。開け放った窓から入る風で、黄色っぽくシミだらけのカーテンが揺れていた。

食べ終えてストローで紅茶をすすっている時、佐々木は会話の糸口を作った。

「法月さんはさあ、美大に行きたいって本当なの」

法月はビックリしたようにして、

「え？ あ、うん、まあ、……」

「特にどこに行きたいとか、あるの」

「いや、別にここに行きたい！ ってわけじゃないんだけど、いや、ほら、やっぱりこういうの好きだし……来年からできれば、塾にも通ってみようかなあと思って」

「そう」

「……佐々木君はないの、そういう、どっか行きたいところ」

「俺？」

ストローから口を離して考えた。

「うーん、まあこれから考えようと思ってるけど、……そうだなあ経済学部とか商学部とかはパスかなあ、そういう金銭に関わる場所は」

言いながら、佐々木は自分でも痛い発言だなと思う。本当は数学がニガテなだけなのだが。

「ふーん」

ここでまた五分ほど沈黙が降りた。制作中の自分の作品を覗きこんだりしながら、互いに視線を合わせないようにした。

「なんで美大に行きたいの？」

「え？」

「というか、美術部に入ったきっかけってなんなの？ 俺はさあ、……」

と佐々木がひとしきり話し終わると、水筒で麦茶か何かを飲んでいた法月は、またしばらく考えるようにして、

「私はね、……」

と語り出した。